

日本英語学会第35回大会発表要旨

〈研究発表〉

第一室 (11月18日午後)

司会 松岡幹就 (山梨大学)

“On the Structure and Derivation of Gerundive Reduced Relative Clauses”

Nobuko Hasegawa (Kanda University of International Studies)

Gerundive relative clauses do not exhibit the most typical characteristics of relatives [3]; i.e., They do not involve a relative pronoun (*wh*-word) or *that*, nor unbounded movement; and a non-subject cannot be relativized. This fact can be captured if the head noun is in fact the subject of the clause from the beginning. The analysis presented is along the lines of [1], [2] and [4], where the label of the subject wins out when merged to AspP, making it nominal, which contrasts with gerundive participial clauses whose label remains clausal.

[1] Chomsky, N. (2013) “Problems of Projection,” *Lingua* 130. [2] Donati, C. and C. Cicchetto (2011) “Relabeling heads: A unified account for relativization structure,” *LI* 42. [3] Lees, R. (1960) *The Grammar of English Nominalizations*, Mouton. [4] Tozawa, T (2015) “On labeling free relative clauses in English,” *EL* 32.

「厳密循環性再考：ラベル付けの観点から」

中島崇法 (東北大学大学院)

極小主義プログラムでは、構造構築の厳密循環性は No-Tampering Condition (NTC, Chomsky (2005[1])) によって保証される。しかしながら、先行研究では Wholesale Late Merger (WLM, Takahashi and Hulsey (2009[2])) などの NTC に違反する操作が提案されており、構造構築が実際に厳密循環的であるか否かは未解決のままである。本発表では Chomsky (2013[3]) の Labeling Algorithm に基づき NTC を修正することで、統辞部門から反循環的操作を取り除くことを試みる。具体的には、NTC の循環節点はラベル付けされた節点であり、ある統辞体内部への併合はその統辞体がラベル付けされていない場合に限り可能になる提案する。この結果、WLM の経験的動機であった A/A' 移動の再構築効果の非対

称性が説明されるとともに、先行研究にとって問題となる A' 移動の中間位置での再構築効果に対しても説明が与えられる。

[1] “Three Factors in Language Design,” *LI* 36. [2] “Wholesale Late Merger: Beyond the A/A' Distinction,” *LI* 40. [3] “Problems of Projection,” *Lingua* 130.

「否定倒置と名詞句内の情報構造に対する示唆」

本多正敏 (筑波大学大学院)

生成文法理論の Cartography の枠組みにおいて、Cruschina (2011[1]) は情報焦点 (Information Focus: IFoc) を入力する統語的位置が2つあると提案している。1つは、話し手の評価を伴う強調の情報焦点 (Emphatic IFoc) であり、CP 領域内に位置する。もう1つは、話し手の評価を伴わない中立の情報焦点 (Neutral IFoc) であり、TP 領域内に位置する。生成文法理論において、構造構築と移動操作の観点から、文と名詞句の並行性を探求する研究が広く進められてきたが、この並行性が情報構造にも及ぶと仮定すると (Aboh et al. (2010[2])), 文と同様に、名詞句内にも強調の情報焦点が存在することになる。先行研究では、名詞句内の語順変換と対比焦点の関連性が盛んに議論されてきたが([2])、本発表では、名詞句内における強調の情報焦点の存在が、英語の否定倒置を伴う名詞句 (e.g., not very good a student) によって経験的に支持されると論じる (e.g. Borroff (2006[3])).

[1] “Discourse-Related Features and Functional Projections”. [2] “DP-Internal Information Structure”. [3] “Degree Phrase Inversion in the Scope of Negation.”

第二室 (11月18日午後)

司会 中尾千鶴 (大東文化大学)

「情報構造に基づくフェイズの特性」

吉田江依子 (名古屋工業大学)

極小主義理論において、派生はフェイズ単位で進むという枠組みが提唱されており、併合と合わせて人間の言語をデザインするための中心的な役割を担っている。ところがフェイズと

は何かという根本的な問いに対しては未だ意見の一致をみていない。例えば Chomsky(2000 [1], 2008 [2]) は v^*P, CP, DP という特定の統語領域をフェイズであると、その主要部が担う EPP 素性が言語要素の辺端への移動を駆動するという提案をしている。しかし、この提案には多くの問題点が指摘されている。

本発表では Who_i did you see [a/*the picture of t_i]? のような違いを基盤として、フェイズ領域とフェイズ主要部に課せられる EPP 素性を「新旧情報/既知・未知」といった情報構造の観点から論じ、フェイズとは何かについて考察する。その際、進化的妥当性という考えを視野に入れて議論する。

[1] “Minimalist Inquiries: The Framework,” *Step by Step*, 89-155, MIT Press. [2] “On Phases,” *Foundational Issues in Linguistic Theory*, 133-166, MIT Press.

“Fragment Answers with Focus Particles”

Hidekazu Tanaka (Okayama University)

Focus particles can attach to a fragmentary answer to a wh-question, e.g., *Q: Anokoro nani-o tabeteitana-no? A: Zassou-sae.* The present talk focuses on such constructions, demonstrating that they observe various island constraints, a property shared by fragmentary answers with negative concord items (cf. [2], [3]). The proposal is that fragmentary answers are best captured by an account that assimilates the construction to sluicing in English: the fragment moves to the CP-spec, and the complement TP elides. Sluicing repairs island violations, but the construction in question does not. Recent works [1] recognize the asymmetry and argues that island repair is a myth. I argue against his position. Fragments with a focus particle are subject to weak islands, a property displayed by sprouting. Based on this, I also argue that the identity condition on ellipsis is syntactic.

[1] Abe, J. (2016) “Make short answers shorter: support for the in-situ approach,” *Syntax* 19 [2] Giannakidou, A. (1998) *Polarity sensitivity as (non) veridical dependency*, Benjamins. [3] Watanabe, A. 2004. “The genesis of negative concord: syntax and morphology of negative doubling,” *LI* 35.

「heart pounding タイプの分詞構文と所有者昇格」

田中江扶 (信州大学)

本発表では、樋口(2009[1])で指摘された *heart pounding* タイプの分詞構文(例: I sat up in bed, *heart pounding in my chest.*)においては、所有格が主語の位置(IP-Spec)に移動した後、分詞構文を生成する主語削除によって義務的に削除されていると主張する。これまで所有者昇格は所有格と目的格の意味的關係から分析されているだけで、統語的な変形規則によって両者が結びつけられていることは示されていない。本分析が正しければ、統語的に所有者昇格という変形規則があることになる。しかし、所有格 NP の移動はいわゆる A-over-A に違反するため、統語的には排除されるはずであるが、最終的には *heart pounding* タイプの分詞構文は生成される。このことは、分詞構文の主語削除規則により主語位置に移動した所有格 NP が削除されることで、文法違反がキャンセルされる可能性があることを示している。本発表ではこの考察に基づき、global な派生の必要性(Lakoff(1970)[2])も考察する。

[1] 『英語の冠詞』開拓社[2] “Global Rules” in *Language* 46, 627-639.

第三室 (11月18日午後)

司会 都築雅子 (中京大学)

「引用マーカー「と」の概念構造」

廣江 顕 (長崎大学)

英語における直接引用文 (direct quote construction: DQC) として可能な文は、どのような動詞が DQC に生起可能かという観点からこれまで考察が加えられてきた (山口(2009[3])) もの、一方で、以下(1)で例示されているように、英語の DQC としては容認されない文が、日本語の DQC の場合、容認されかつ生産的であるという事実には原理的な説明が与えられなかった。

(1) a. *It's hot in here,” he opened the window.

b. 「ここは暑いよな」と彼は窓を開けた。

本発表では、(1)で観察される文法性の対照性は、日本語には引用マーカーの「と」があり、「と」が統語構造ではなく、その概念構造 (Jackendoff (1990[1], 1997[2])) において、DQ を

選択していると仮定することにより、原理的に説明が可能であることを主張する。

[1] *Semantic Structures*, MIT Press. [2] *The Architecture of the Language Faculty*, MIT Press. [3] 『明晰な引用, しなやかな引用—話法の日英対照研究』, シリーズ言語対照<外から見る日本語>第10巻, くろしお出版。

「for all sb knows の意味・用法の記述」

平沢慎也 (東京大学 (非常勤))

for all sb knows (以下「当該構文」) の意味・用法を詳細に記述する。まずこの表現に多義性を認める。当該構文が修飾する節を X とすれば、X+当該構文は①「sb は十分な知識を持っていないが、X の可能性があると思っている」、②「sb は十分な知識を持っていないので、意外な事態 X の成立可能性を否定できない=sb は意外な事態 X の成立可能性を否定できないほど知識不足である」、③「sb は非現実的な事態 X の成立可能性すら否定できないほど知識不足である」という互いに関連してはいるが区別可能な3つの意味を表しうる。次に、X が推量・可能性を表す法助動詞を伴うか否かによらず、X+当該構文は推量・可能性の意味を含む。最後に、X+当該構文の使用が会話や小説に偏るのは、「よく知らないのにもものを言う」という意味的な特性ゆえのことであって、純粋に文体的な特性によるのではないということ(当該構文が用いられた学術論文の観察を通して)指摘する。

「英語の「非意図的」結果構文について」

浅井良策 (大阪大学)

影山 (2005[1]) は、(1)のような対比を提示し、英語の結果構文において「意図的な結果」を表わすタイプの方が「非意図的な結果」を表わすタイプよりも成立しやすいと主張している。

(1) a. A wise dog barked his master awake to warn him of the fire.

b. *A stray dog in the distance barked the sleeping child awake.

(影山 2005: 92)

影山 (2005[1]) によれば、「非意図的な結果」を表わす結果構文は、表現の範囲が限定されているか (1b) のように、そもそも容認困難な表現ということになる。このような捉え方に反して、本発表では、i) 「非意図」結果構文は必ずしも表現範囲が限定されたものばかりではなく、

様々な動詞や結果句と共起する生産的な事例が存在し、ii) また、(1b) に類似した動物の意図しない行為の結果を表わす実例を示すことで、結果構文の容認性向上に関して「意図的な結果」以外にも考慮すべき要因が存在することを指摘する。

[1] 「辞書の知識と語用論的知識—語彙概念構造とクオリア構造の融合に向けて—」『レキシコンフォーラム No.1』ひつじ書房

第四室 (11月18日午後)

司会 堀田優子 (金沢大学)

「単数構文と複数構文」

小早川 暁 (獨協大学)

単数と複数を区別する英語では、単数表現は〈単数〉を表し、複数表現は〈複数〉を表すのが通例である。ところが、用例を広く観察してみると、①単数表現が〈複数〉を表すこともあれば (e.g. *The Queen is arriving.* [1])、②複数表現が〈単数〉を表すこともある (e.g. *one or two boys, three boys and girls*)。①の現象と②の現象は、一見すると方向が逆で、互いに相容れない性質をもつと思われるかもしれない。本発表では、〈単数〉と〈複数〉が反意の関係にあることに着目し、両者を統合するフレームを提案する。そして、これにより、①と②の現象に対する統一的な説明を試みる。さらに、反意という観点から単数構文と複数構文の構文内ネットワークと構文間ネットワークを明らかにし、二つの現象を関連構文からなるネットワーク上に適切に位置づける。

[1] Radden, G. and R. Dirven (2007) *Cognitive English Grammar*, John Benjamins.

「前置詞随伴に基づく前置詞らしさの規定: 文法化の漸進性に関する共時的研究」

林 智昭 (近畿大学 (非常勤))

文法化の一例として、現在分詞・前置詞のいずれであるのか、判断が難しい following などの動詞派生前置詞がある。この種の言語変化は、語彙・音韻の変化と比べて漸進的な性質を持ち、分析が困難とされる (Leech *et al.* 2009[1])。本研究の主眼は、文法化の漸進性を、共時コーパスのデータにより統一的観点から数量的に規定していくことにある。本研究では、同様の試み

(Fukaya 1997[2]) を援用し、分析対象とする事例数を増やすことにより追試と妥当性の検討を行う。具体的には、Corpus of Contemporary American English (COCA) のデータを使用し、前置詞随伴の形をとる動詞派生前置詞を調査した。結果、*during* を除く大半の事例は随伴の形をとらないと判明した。先行研究 (Hayashi 2015[3]) と異なる分布の偏りは、文法化現象を捉えるには複数のパラメーターにより検討を行う必要がある、という方法的な示唆を与えるものである。

[1] *Change in Contemporary English*. [2] “The Emergence of *-ing* Prepositions in English: A Corpus-Based Study.” [3] “Prepositionalities of Deverbal Prepositions.”

「日英語の胸部と腹部の理解をめぐる一比喩的認知を生む身体経験、社会・文化経験の観点から」

後藤秀貴 (大阪大学大学院)

Kövecses (2005[1]) は、言語間で見られる比喩表現の共通性は人類共通の身体経験に、相違性は各言語の社会・文化経験に由来する傾向を指摘している。本発表では、胸部や腹部を指す語を含み、何らかの精神作用を表す日英語の比喩表現を成立基盤の観点から検討することで、「日本語の胸表現については身体経験を中心に、腹表現については社会・文化経験を中心に説明すべきである」という後藤 (2015[2]) の提案を支持する。具体的に、胸部では身体経験に由来すると考えられる表現が日英語で多く見つかるとに対し、腹部ではその傾向が見られず、代わりに日本の社会・文化的観点から説明すべき表現が中心であることを示す (e.g. 胸が張り裂ける、*heartrending*、腹を括る)。本発表ではさらに、現代の *heart* の理解が歴史的に紆余曲折を経て確立したことを示し、顕著な身体経験が認められる胸部についても、社会・文化的背景の検討が不可欠であるという新たな視点を加える。

[1] *Metaphor in Culture*. Cambridge University Press. [2] 「「腹」と「胸」を参照した日本語の比喩表現とその特徴—比喩的認知を生み出す身体基盤・文化基盤の観点から—」『日本語学会第 151 回大会予稿集』.

第五室 (11 月 18 日午後)

司会 村上まどか (実践女子大学)

「日本手話の right periphery の考察：否定とモダリティ」

松岡和美 (慶應義塾大学)

近年の日本語のモダリティ研究では、否定や時制の形態素と共起する際の語順を用いてその性質を明らかにする統語的なアプローチが提案されている (井上 2007[1] など)。また手話言語学では、ひとつの手話言語にスコープや意味が異なる複数の否定表現があることが報告されている。松岡 (2015[2]) で取り上げられた 4 種に「意思の否定」を示す NEG-5 を加えた 5 つの否定表現は文末に現れるが、やはり文末に現れるモダリティ表現との語順の制約から、否定表現によって生起する統語的位置が異なることが確認できる。さらに、完了アスペクトの口型 PA は擬似モーダルとは共起できるが、真正モーダルとは共起できない。このように、モダリティ表現・否定表現・アスペクト表現の間に見られる共起や語順のパターンを手がかりにして、日本手話の right periphery の考察が可能であることを示す。

[1] 日本語のモーダルの特徴再考. 長谷川 (編) 『日本語の主文現象』 pp.227-260 東京：ひつじ書房. [2] 『日本手話で学ぶ手話言語学の基礎』 東京：くろしお出版.

「動詞 end up の歴史変化と PredP の出現」

田中祐太 (名古屋大学大学院)

英語の動詞 *end up* は、二つの興味深い統語的特徴を持つ。第一に、動詞 *end up* には様々な要素が後続できる。第二に、後続できる要素として *by+V-ing* と単純な *V-ing* のどちらも可能である。秋元 (1998[1]) の調査では、現代英語において単純な *V-ing* の方が頻度において優勢であることが明らかにされている。本発表では、二つの特徴は歴史的には異なることを電子コーパスから得られたデータより示す。二つの特徴は付加詞から補部への再分析が起きた結果として、その補部に叙述関係を認可する機能範疇 PredP が出現した事に関連付けられると主張する。この構造変化の過程で様々な要素が段階的に、かつ一定の仕方で見られるようになった事を示す。また付加詞としての *by+V-ing* が、述

語として機能する現在分詞の V-ing に取って代わられたと説明する。最後に、PredP の出現後のさらなる変化を示す証拠を提示する。

[1] 秋元実治 (1998) 「"end up" 構文について」『現代英語の語法と文法: 小西友七先生傘寿記念論文集』, 大修館書店。

第六室 (11 月 18 日午後)

司会 吉田悦子 (三重大学)

「just の対人関係調整機能」

大澤 舞 (東邦大学)

とりたて表現には、意味的に「限定」と「反限定」に分類されるものがある (野田 (2015[1])). 日本語には、それぞれを表す専用のとりたて表現がある。例えば、「限定」を表す「だけ」「しか」や、「反限定」を表すやわらげの「も」や例示の「なんか」などが挙げられる。しかし、英語には「限定」を表すとりたて表現である副詞はあるが (only や just など)、「反限定」を表す副詞はない。

本発表では、「聞き手への負担軽減」という語用論的効果に注目する。日本語では、この効果を「反限定」専用のとりたて表現を用いて語彙的に表すのに対し、英語では、「限定」を表すとりたて表現 just を用いて語用論的に表すということを論じる。さらに、このことが、Huang (2000[2])による、日本語が語用論的言語であり、英語が統語的言語であるという類型論的分類に対してもつ意味合いを探る。

[1] 野田尚史 (2015) 「日本語とスペイン語のとりたて表現の意味体系」『日本語文法』15 (2)[2] Huang, Yan (2000) *Anaphora*, Oxford University Press.

「insubordination に関する一考察

—If + not [P] 構文と慣習性をめぐって—

平尾恵美 (奈良女子大学大学院)

Evans (2007[1]) は、従属節の慣習化された主節用法を insubordination と呼び、その形成には連続体をなす 4 段階 (①従属関係: 主節も従属節も明示的に表れる ②主節省略③慣習化された主節省略 ④構文化: 明示的要素を保ったままでは省略された主節を回復できない) があると主張する。

感情表出機能を持つ If + not [P] 構文 (例:

「Tom じゃないか!」と Tom に会った驚きを表す Why, if it isn't Tom!) も insubordination の一種である。Panther and Thornburg (2003[2] 以下 P&T) は、当該構文は統語的・語用論的に高度に自立しており、主節の想定が不可能だと主張した。これは、当該構文が上述の段階④に達しているという旨の指摘と考えられる。

本発表では、if を伴う文の先行研究、英語母語話者への調査、他の if 節 insubordination との比較をふまえ、当該構文が a) P&T の主張に反して、解釈上の主節を回復できること b) 段階③と④の間に位置することを示す。

[1] "Insubordination and its Uses" in *Finiteness*, OUP. [2] "Metonymies as Natural Inference and Activation Schemas" Benjamins.

「『恥知らずな X』と『恥ずかしい X』における視点の対比— "shameless" と "shameful" の意味理解—」

有光奈美 (東洋大学)

対比や否定性について、Cruse (1986 [1]) や Horn (1989 [2])をはじめ興味深い先行研究がある。本発表では-less と -ful が多寡を述べる対照的な接尾辞であると踏まえた上で、「一方の形容詞で描写すれば、もう片方の描写は当てはまらない」とは説明できない事例の存在を指摘する。同一写真を "This picture is colorless." と "This picture is colorful." の両方では描写できない。しかし、"shameful/shameless conduct" は、共に日本語で「恥ずかしい行為」と表現しうる。つまり、"shameless" と "shameful" の意味理解には colorless vs. colorful のような対照性とは異なるメカニズムが存在する。「色」の多寡は客観的だが、「恥」の多寡は話者の視点や価値判断が決め手になる。「恥」は主観だけでなく対人関係的概念であり、「X を恥知らず/ 恥ずかしいと感じる」という心理は話者の視点や価値判断、間主観性に影響される。OED, COCA 等とも照らし、共起性も論じる。

[1] Cruse, D. A. 1986. *Lexical Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press. [2] Horn, Laurence R. 1989. *A Natural History of Negation*. Chicago: The University of Chicago Press.

「[a/the N] [the N of NP]形式表現とラベル付け計算法」

西原俊明 (長崎大学)

英語は、[a city (DP₁)] [the size of New York (DP₂)]の連鎖が可能である。前置詞を想定することではこの形式の特徴、及びDP₂が付加詞の特徴を示すことを捉えられない。本発表では、Chomsky (2013[1])、中島(2016[2])で提案されたラベル付け計算法が問題形式の特徴を捉えることを明らかにする。問題の形式では、どちらかのDPが移動しなければならない。DP₂を移動させ、DP₁に付加(ペア併合)させることにより、第一成分のラベルはDPとなり、DP₂は付加詞の位置を占める。

[1] “Problems of Projection,” *Lingua*, Vol. 130, 33-49. [2] 『島の眺望——補文標識選択と島の制約と受動化』 研究社, 東京

「二種類の from-to 表現と統辞的対称性について」

小林亮一朗 (上智大学大学院)

英語には(1)の所謂 *from-to* 表現が存在し、構成素を成すことが知られる(Williams 1994[2])。本発表は複数の統辞的テストを通じ、主に英語の *from-to* 表現に2種の異なる下位分類が存在することを論じる。*from-to* PPs は(2)のように「時間や場所の起終点を表す」通常の表現と、(1)の *path* や *range* を表すものが存在する。

(1) John played the banjo [from Alabama to Louisiana].

(2) Taro took a bus [from Tokyo to Osaka].

これらは表面上同じ *from-to* PPs に見えるが、2つの点で大きく異なる：(i) PP_{from} と PP_{to} を分離することができず、(ii) PP_{from} も PP_{to} も独立してVPを修飾できない。対称的 *from-to* PPs が {XP, YP} の構造を成すと主張し、上述の性質の説明を試みる。この提案が正しければ、Chomsky (2013[1])のラベル付けアルゴリズムについて、「素性共有によるラベル付けはXPとYP間に一致関係がある場合のみに限り可能である」という要請が、強すぎる可能性を示唆することになる。

[1] Chomsky, N. (2013) “Problems on Projection,” *Lingua* 130. [2] Williams, E. (1994) *Thematic*

「ラベル決定アルゴリズムによる節動名詞の分析」

佐藤亮輔 (東北大学大学院)

本発表では Chomsky (2013 [1])のラベル決定アルゴリズムを用い、John liking Maryのような節動名詞のラベルは、その主語と主要部が共通素性を共有することによる NominalP であると提案する。この帰結として、(1)節動名詞主語が対格で現れる、(2)節動名詞主語を繰り上げ述語の主語とした*John appears liking Maryが非文法的である(Pires (2006 [2]))という2つの事実が説明される。さらに、等位接続や省略現象に関する新たな事実を示す。具体的には、(3)節動名詞が動詞派生名詞と等位接続できる、(4)節動名詞を先行詞とし to 不定詞節に動詞句省略を適用できるが、to 不定詞節を先行詞とし節動名詞に対応する省略を適用できない事実などを指摘する。

[1] “Problems of Projection,” *Lingua* 130. [2] *The Minimalist Syntax of Defective Domains: Gerunds and Infinitives*, Benjamins.

「Tough 構文における再構築について」

阿部 潤 (元東北学院大学)

本発表では、tough 構文において、なぜA束縛や変項束縛については再構築効果が見られるのに対して、作用域については再構築効果が見られないのかという問題を取り上げる。Brody (1993[1])によって提唱された tough 構文のA'移動+A移動分析を採用し、A束縛や変項束縛について再構築効果が見られることについては、移動によって構成されたチェーンの再構築特性によって説明する。しかしながら、作用域について再構築効果が見られないことに関しては、うまく説明できない。この問題に対して、本発表では、proが基底の位置に生成され、Brody(1993)が提案するように、A'移動とA移動の二段階の操作が適用されるが、その途中段階で、Lebeaux (2009[2])に従い、proが語彙要素によって置換されると提案する。この派生によって、proの指示的特性が作用域の再構築効果を阻むと主張する。

[1] “Theory and Arguments,” *LI* 24, 1-23. [2] *Where Does Binding Theory Apply?* MIT Press, Cambridge,

MA.

第八室 (11月19日午前)

司会 窪田悠介 (筑波大学)

「JB-X DM-Y 構文の構成性について」

吉川裕介 (近畿大学)

高橋 寛 (昭和大学)

英語には(1)が示すように、Just because 節が主語位置に現れ、否定辞と主動詞が後続する統語形式をもつ構文があり、これを JB-X DM-Y 構文と呼ぶ (Bender & Kathol 2001)。

(1) **Just because** we live in Berkeley **doesn't mean** we're left wing radicals.

本発表の主眼は、JB-X DM-Y 構文に生起する just because 節と主動詞 mean の意味機能を明らかにし、本構文の推論否定の解釈が構文を構成する各語彙の意味から計算できる点を語彙意味論の立場から明らかにすることにある。具体的には、主動詞 mean は原因と結果を項にとる CAUSE の意味で用いられ、両者の間に成立する因果関係の適格性を決定づけることを示す。また、文頭の just の語彙的意味は強意副詞 merely や simply のそれと同じであり、「because 節が導く真の内容が、推論の根拠として不十分である」という意味機能を果たし、この just の意味が否定辞を認可している点を指摘する。

[1] Bender, E. and A. Kathol. 2001. Constructional Effects of *Just Because...Doesn't Mean...* BLS 27.
[2] Hirose, Y. 1991. On a certain nominal use of *because*-clauses. EL 8.

「所有構文における名詞の意味機能」

小深田祐子 (熊本学園大学)

本発表は、英語の所有構文の定性効果と目的語名詞句の表わす意味機能との関係について考察をおこなう。とりわけ、西山(2003, 2013[1], [2])の日本語の分析を踏まえ、名詞句の意味機能の観点から、英語の所有構文がどのように位置づけられるかを考える。具体的には、西山が議論をおこなう際に取り入れた理論的概念の変項名詞句や名詞の指示性、飽和性などを手がかりにして、英語の所有構文の解釈と目的語名詞の意味機能との関係を探る。まず、have の目的語にどのようなタイプの名詞が用いられるのかを分類し、英語の所有構文の定性効果を観察する。その上で、目的語名詞の飽和性は常に

一定ではなく、ある条件下では、その飽和性が変化しうることを指摘する。すなわち、本発表は、語彙レベルにおける名詞と特定の解釈における名詞の意味機能との関係を探ることを目標とする。

[1]西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句』 ひつじ書房。 [2]西山佑司 (2013) 『名詞句の世界 その意味と解釈の神秘に迫る』 ひつじ書房。

司会 村上まどか (実践女子大学)

「名詞結合の派生とステイタスについて: 転換名詞としての分析」

西牧和也 (筑波大学 (非常勤))

英語における名詞の結合(e.g. *ice cream*)には語と句の境界に跨る特徴が観察される。このため、当該表現は、N-N複合語なのか、それとも名詞句なのかという問題が、常に議論されてきた(Bauer (1998 [1])). 本発表では、そのステイタスを考察し、N-N複合語とされる名詞結合は、句範疇(NP)から語彙範疇(N⁰)への転換により生じる転換名詞であると提案する。英語には、真の意味でのN-N複合語が存在しないことを論証したうえで、いわゆるN-N複合語と転換名詞の平行性を指摘する。例えば、前者には左強勢となる傾向(e.g. *ice cream*)があるが、後者も同様である(e.g. *to get away*→*a get-away*)。Nagano (2008 [2])は、転換名詞が左強勢となるのは、名詞という範疇を明示するために、転換名詞に形式的調整が働くためであると分析している。N-N複合語に特有とされる左強勢も、名詞(N⁰)たるべき形式的調整の結果、生じるものであることを示す。

[1] "When Is a Sequence of Two Nouns a Compound in English?" [2] *Conversion and Back-Formation in English*.

「属格複合語内に見られる識別焦点と主要部削除」

大久保龍寛 (茨城県立医療大学)

英語の属格複合語 (genitive compounds) は語と句の特性を示す。語の特性として、島村 (2014 [1]) は非主要部の持つ分類機能を挙げている。また、句の特性として、主要部削除などの統語操作を許すことが挙げられる (例: *Alzheimer's disease*)。このような属格複合語の

二面性を説明することが本発表の目的である。

まず、非主要部の分類機能は、当該要素が識別焦点 (identificational focus) として機能することから派生的に生じるものであることを示す。

É. Kiss (1998 [2]) によると、識別焦点要素は、それが叙述する要素の下位集合を作り出す。したがって、識別焦点を有する、属格複合語の非主要部は主要部要素の下位集合を作り出すのである。また、本発表では、焦点要素と Foc 主要部の一致によりその補部の削除が可能になるという Corver and van Koppen (2009 [3]) の分析に基づき、同様のプロセスにより当該複合語の主要部が削除されると主張する。

[1] 『語と句と名付け機能』 [2] “Identificational Focus versus Information Focus.” [3] “Let’s Focus on Noun Phrase Ellipsis.”

第九室 (11月19日午前)

司会 島田雅晴 (筑波大学)

「A/A-bar 区分と Improper Movement の再考察」

大塚知昇 (九州共立大学)

本発表は、POP+([1])の Free Merger (FM)のもとでは、要素のコピーに基づく痕跡の定義は保持が困難となり、伝統的 A/A-bar 区分や、Improper Movement (IM)も再定義が必要となると主張し、これに対する新たな説明を提示することで、Phase 理論の枠組みの発展に貢献することを目標とする。

POP+では、あらゆる併合操作は自由適用可能であるという FM が想定された。FMのもと「移動/内的併合」を制限することは理論的に不可能となり、A/A-bar 区分やそれに対する制約の想定は理論上困難となる。更に FM では、派生がうまくいく限りコピーは無制限にあらゆる場所に生成されると考えられ、これは明らかに非経済的な結果を導き出す。従って、伝統的な、痕跡を「移動/内的併合」の結果の NP のコピーとみなす定義は、POP+のもとでは保持が困難となる。

この状況のもと、本発表では併合、Label、語彙項目のみに基づき、新たな A/A-bar 区分、IM の説明可能性を探る。

[1] Chomsky (2015) “Problems of Projection: Extensions,” *Structures, Strategies and Beyond*, 3-16,

John Benjamins.

「時制と wh 一致現象: 極小理論による一考察」

森本雄樹 (関西学院大学大学院)

英語における埋め込み疑問節と関係節において、顕在的な wh 句が現れる場合、前者は時制の指定に制限が見られるのに対して、後者は見られない。そこで本発表では、極小理論の Agree 操作下で作動する、一方で節の特性と時制、他方で格と形態変化という2つを結びつける特徴を持つ素性を指定することで説明を試みる。関係節内の前置詞残留、随伴や空演算子等に関わるデータも考察の対象とする。

[1] Pesetsky and Torrego (2001) “T-to-C movement: causes and consequences.” [2] Heck, Fabian. (2008) *On Pied-Piping: Wh-Movement and Beyond*.

司会 松岡幹就 (山梨大学)

「vP」

葛西宏信 (北九州市立大学)

vP の内部構造としては、外項が VP よりも高い位置を占めていると一般に仮定されているが、本発表では外項と VP を入れ替えた構造のほうがより望ましいと主張する。この仮説が正しければ、主語が束縛する束縛代名詞が VP 内にあった場合、その主語が目的語よりも狭い作用域を取ることができないという[2]の観察を正しくとらえることができる。また、受け身の by 句は付加詞ではなく、項のように振る舞うことが観察されているが、by 句が能動態の外項が基底生成される位置と同じ位置(ここでの分析では v の補部の位置)に生起すると考えれば、by 句が動詞の後に現れるということもとらえることができる。

また、VP の主要部が範疇的に未指定の要素であり、v との Agree によってその値が決められると主張する。本分析では、VP は vP の指定部にあるので、[1]で指摘されている vP レベルでの XP-YP 問題は、Agree によって回避されるということになる。

[1] “Problems of Projection,” *Lingua* 130: 33-49. [2] “Weak crossover, scope, and agreement in a minimalist framework,” *WCCFL* 13, 334-349.

「VP 削除からみた状態変化動詞の項交替」

梶本 顕士 (北海道教育大学)

状態変化動詞 (break, melt 等) は、主題項が具現化する自動詞形 (The snow melted.) と主題項と原因項が具現化する使役形 (The heat melted the snow.) の2つの交替形を持つ。本論では自動詞形は主題項が動詞の補部として併合される構造であり、使役形はこの基本構造が軽動詞 v_{cause} の補部として、原因項がその指定部として併合される構造であると提案する (Folli and Harley (2006 [1])). 本提案により、削除に課せられる統語的同一性の条件 (Merchant (2013 [2])) の下で、上記2つの交替形が示すVP削除の非対称的な振る舞い (使役形を先行詞にして自動詞形を削除することはできるが、逆の場合には削除できないこと) に説明が与えられることを示す。また本提案の帰結として、自動詞形に現れる、原因を表す *from* 句はVPに付加すること、*Sluicing* のデータも説明できること、原因項と *from* 句はイベント意味論上、動作主とは異なる扱いを受けている可能性があることを論じる。

[1] "On the Licensing of Causatives of Directed Motion: Waltzing Matilda All Over." [2] "Voice and Ellipsis."

第十室 (11月19日午前)

司会 米山聖子 (大東文化大学)

“Phonological Optionality in Japanese Loanwords”

Kohei Nishimura (Iwaki Meisei University)

In this talk, I report the results of a statistical survey of phonological optionality (free alternation) in the loanwords found in the Corpus of Spontaneous Japanese [1]. A large number of Japanese loanwords have two or more variants in pronunciation that do not entail semantic distinctions [2]. For example, it is well known that the English loanword *baggu* “bag” is often pronounced as *bakku* with geminate devoicing without any difference in meaning. This survey reveals that such phonological optionality occurs more widely than previous studies have found, and little attention has been paid to the majority of instances of this phonological phenomenon. Important findings of the survey are 1) a large number of the loanword variants ignore the phonemic distinctions of Japanese, and 2) they show

alternations independent of the markedness of phonological/phonetic structures.

[1] NINJAL (2008) *The Corpus of Spontaneous Japanese*, Ver.2. Database. [2] Ito J. & A. Mester (1995) *Japanese Phonology*, In Goldsmith (ed.).

“Empirical Evidence to Consonant Harmony in English Reduplication”

Hideo Kobayashi (University of Hyogo (part-time))

The research question of this study was whether or not long distant consonantal assimilation of the place of articulation between a non-word base and a reduplicative onset empirically occurs in English adult grammar when the latter form is derived from the former. This issue is addressed in the context of Correspondence Theory [1]. The aim was to find the occurrence of AGREE [2] ranked *active* in adult grammar by conducting two guided reduplicative experiments with 18 adult native English speakers for each of two tasks: a rhyme task and a free task. According to a past study [3], this active constraint is characterized as the emergence of the unmarked. This study concluded that Consonant Harmony between a non-word base onset and a non-word reduplicant onset is a rare phenomenon in adult English grammar, except when exclusively rhyming reduplicants are generated.

[1] McCarthy, J. and A. Prince (1995) “Faithfulness and reduplicative identity,” *Papers in OT*. UMass Occasional Papers 18. [2] Pater, J. and A. Werle (2003). “Direction of assimilation in child Consonant Harmony,” *CJL* 48. [3] Fikkert, P. et al. (2005) “Rhymes as a window into grammar,” *Proceedings of the 29th ABUCLD* 1.

司会 中尾千鶴 (大東文化大学)

「北米英語の非対立的音声変異の知覚: 弾音と閉鎖音の場合」

米山聖子 (大東文化大)

北原真冬 (上智大学)

田嶋圭一 (法政大学)

北米の英語(以降 AE)において、母音間の歯茎閉鎖音は歯茎弾音[r]として実現される。歯茎弾音は/tや/dの異音であり、AEにおいて他の音声と語彙的対立を持たない。本発表は「日本人英語学習者が異音の違いに敏感であるならば、それを自然発話の単語を認識する際にも利用出来るだろうか」という研究課題について取り組む。実験の対象となる刺激は Pitt ら (2011[1])に従い半数を *city*, *better* などの弾音優

勢語、残り半数を *faster*、*custom* などの閉鎖音優勢語とした。その全てについて弾音と閉鎖音の両方のトークンを用意し、語彙性判断課題を行なった。既発表の実験は、英検準1級レベルではあるが留学経験のない大学生を中心に行ない、弾音優勢単語の正答率が有意に低いという結果を得た。今回は少なくとも3ヶ月以上の留学経験者について実験を行った結果を報告すると共に、その背景となる音韻・知覚学習に関する仮説を検討する。

[1] “Exploring the role of exposure frequency in recognizing pronunciation variants,” *Journal of Phonetics*, 39, 304-311.

「最近の名前と一般語の音韻パターンの相違について」

深澤はるか (慶應義塾大学)
北原真冬 (上智大学)

最近の子どもにおける「光宙(ピカチュウ)」や「希空(ノア)」に代表される、伝統的人名とは異なる一群の名前は、2000年頃から様々なメディア上で盛んに取り上げられるようになり、キラキラネームと呼ばれるようになった(伊東 2015[1])。それらの音韻的側面に注目し、明治安田生命「名前ランキング[2]」の「読み方ベスト50」を元データとし、名前の持つ音韻的空間が一般語のそれに対して異なるか否か、異なるとすれば、どのように特徴付けられるかについて解析を試みる。具体的には、両者の頻度順位を元にして、音韻的な制約の分布という観点から一般語と名前の音韻空間の共通点と違いについて、定量的・定性的な議論を深めることを目標とする。例えば、Onset 制約は一般語の CV パターン出現頻度 14 位まで一度も破られないが、名前においては VCVCV が 5 位に現れて早々に破られる。一方、拗音の出現やモーラ数のパターンは両者に共通する。

[1] 『キラキラネームの大研究』新潮社、東京。

[2]<http://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/>

第十一室 (11月19日午前)

司会 秦かおり (大阪大学)

「英語学術論文に頻出する学術語彙リストの作成」

清水 眞 (東京理科大学)
村田真樹 (鳥取大学大学院)

英語学術論文の読解という問題を基本語彙リスト、学術語彙リストを中心に考察する。基本語彙リストは、JACET 2188[1]を用いる。日本の英語教育の現状を一番的確に反映し、学術目的に最適であるからである。学術語彙リストは、Coxhead(2000[2])の EGAP リストでも、Hyland & Tse (2007[3]) の ESAP リストでもなく、特定の学術誌をもとに編纂する。世界初ではないかと思われる。2017年6月23日の時点でカバー率 85.72%をマークした。最終的に95%となるよう調整を行う。

[1] 『新 JACET8000』(桐原書店) [2] “A New Academic Word List” *TESOL Quarterly* 34.1:2, 213-238[3] “Is there an 'Academic Vocabulary'?” *TESOL Quarterly* 4.1.1:2, 235-253.

「EFL グループ相互行為における談話標識 “So” の機能的役割：アカデミックディスコースにおける言語社会化に関するエスノグラフィー研究」

抽冬紘和 (関西大学大学院)

本研究は、言語社会化(Language Socialization)に関するエスノグラフィー研究の観点より、談話標識“So”が EFL グループ相互行為内でどのように、英語学習者の言語社会化のために機能するかを考察する。使用するデータは発表者が、2014年に国内の私立大学におけるグローバル・異文化教育プログラムにおいて行ったエスノグラフィー研究で収集したものである。

言語社会化理論では社会化の達成を表すことは極めて困難である。しかし、言語使用、言語習得に焦点を当て、学習者の所属するディスコースへの社会化の過程を見るという観点を着眼点と踏まえた場合、本研究では談話標識の機能的役割と、それが現れる場面での相互行為における言語社会化を見ることができるといえる。この授業内での学習者の目標であるコミュニケーション能力の習得、その能力を必要とする場面への社会化に談話標識は貢献し、機能してい

ると考える。

司会 鈴木 亨 (山形大学)

“Applying Advances in Cognitive Linguistic Typology to Phrasal Verb Instruction”

Ryan Spring (Tohoku University)

This study utilizes Talmy's [1] theory of event conflation to create a new method of teaching phrasal verbs. Though much second language acquisition research has shown that learners of different language types have difficulty learning motion and change of state events in a second language, no studies have been conducted showing how this knowledge can be used pedagogically. This study reports on how these insights can be practically applied to the teaching of phrasal verbs, particularly to first language speakers of verb-framed languages such as Japanese. It suggests a new teaching method, and also reports the results of an educational experiment, verifying that it is more efficient and effective than traditional memorization techniques and helps learners to conjecture the meanings of novel phrasal verbs.

[1] Talmy, L. (1985). Lexicalization patterns. Semantic structure in lexical form. In T. Shopen (Ed.), *Language typology and syntactic description* (3), 36-149. Cambridge: CUP.

“Is the OPOL Approach an Effective Method in Raising a Bilingual Child in Japan?”

Barry Kavanagh (Tohoku University)

The One parent one language (OPOL) approach is the standard that most families follow in trying to raise their child bilingually. This involves one parent speaking only in the minority language with the child. It was an approach that was once praised but is now criticized for being inadequate [1]. This paper addresses whether or not the OPOL approach is an effective method in raising a bilingual child in Japan through case studies of 8 international families comprising of 14 children aged 4-12.

Most of the parents within the study tried to adopt the one parent one language (OPOL) approach to varying degrees of success. This success was dependent however on parental attitudes, their linguistic behavior and the adherence to the OPOL approach both within and outside of the home.

[1] De Houwer, Annick. (2007). “Parental language input patterns and children's bilingual use”. *Applied Psycholinguistics*, 28, 411-424.

〈シンポジウム〉

A室 (11月18日午後)

「意味と統語構造のインターフェイス」

司会 西垣内泰介 (神戸松蔭女子学院大学)

従来 語彙の意味的特性として捉えられてきた可算・不可算の区別、意味論・語用論の観点から考察されることが多かった副詞節とモダリティ、視点の関係、そして主に形式意味論の観点から分析されてきた潜伏疑問と指定文について、統語的な機能範疇の性質、節を構成する多層的な構造、そのような節構造を前提とする移動や削除操作など、現代の統語理論の知見および道具立てによって貢献する可能性を示す。より具体的には、意味に関する直感や内省のみに依拠しがちであった当該の言語現象の分析にc統御などの構造上の相対関係、移動や削除などの操作に課せられる条件など統語的な概念が関与すること、また意味的な現象が実は統語的素性や構造およびそれらに対する操作などが相互作用することから現象として帰結する可能性があることを示し、意味と統語構造のインターフェイスの可能世界を探求する。

「可算名詞・不可算名詞の別、一般数、および数素性」

講師 藤井友比呂 (横浜国立大学)

名詞句の統語構造に関して、可算・不可算の別ほどの程度統語構造にエンコードされているか、という問いがある。区別が語彙的になされているという伝統的な立場 (Chierchia 1998 [2]) に加え、近年は、特定の機能範疇の有無がその区別を生み出すとする仮説も影響力が大きい (Borer 2005 [1])。本発表では、上述の問いを念頭に置きつつ、日本語に可算・不可算の別があるかというより基本的な問いを再検討し、日本語名詞句がどのような数素性を持つかを削除現象に基づいて検討する。日本語では可算・不可算が区別されている証拠は多くは集まらず、むしろ物体・物質が区別されていること (cf. Watanabe 2010 [3])、日本語の名詞句の数素性は「一般数」であるとする議論を提出することを試みる。

[1] *Structuring Sense*; [2] “Reference to Kinds

across Languages,” *NLS* 6; [3] “Vague Quantity, Numerals, and Natural Numbers,” *Syntax* 13.

「副詞節の internal syntax と external syntax」

講師 遠藤喜雄 (神田外語大学)

本発表では、副詞節の持つ2つの構造とその関係を論じる: (i)内部構造 (internal syntax) と(ii)主文と結びつく際に用いられる外側の構造 (external syntax)。まず、副詞節の先行研究 (削除分析と移動分析) を Haegeman (2012[1]) や Endo and Haegeman (2014 [2])等から紹介し、internal syntax と external syntax の2つを区別しながらもそれらを統合することが必要であることを見る。次に、日本語の副詞節をカートグラフィーの点から分析し、従来の日本語学 (野田 1989[3]) の分析よりもより詳細な階層構造が副詞節にあることを見る。そこで、Nishigauchi (2014[4]) 等の知見を参照しながら、視点、ダイクシス、モダリティの点から論を展開する。

[1] Adverbial clauses, MCP, and COL. Oxford. [2] Adverbial Concord. MITWPL 73. (To appear in *Glossa*) [3] 「文構成」『日本語と日本語教育 1』明治書院 [4] Reflexive binding. JEAL 23.

「潜伏疑問の統語構造」

講師 西垣内泰介 (神戸松蔭女子学院大学)

潜伏疑問 (1) We want to know *the capital of Vermont*. の意味的特性が指定文 (2) *Montpelier is the capital of Vermont*. の特性を内包するだけでなく、潜伏疑問と指定文は統語的な構造、派生が本質的に同じものであることを示す。これらの構文の中核にあるのは関係を表す名詞—たとえば *capital* は国や州 (の名前) と都市 (の名前) の関係を表す—を主要部とする名詞句 (3) $[N_P[N[N \text{ capital}]] \text{ (of) Montpelier}] \text{ (of) Vermont}$ の内項—「値」を表す—が焦点化されることで指定文が派生され、内項に空演算子(Op) が生成されて CP 指定部に移動することで潜伏疑問が派生される。(3) の構造を支持する連結性 (connectivity) にもとづく議論を提出し、潜伏疑問および指定文について従来意味論で議論されてきた問題に対して統語構造にもとづく提案をおこなう。

B 室 (11 月 18 日午後)

「話しことばが新たに拓く文法の多重性: 理論と実践」

司会 高梨博子 (日本女子大学)

本シンポジウムでは、話しことばを相互行為として捉える文法研究 (Usage-based approach, Construction Grammar, Dialogic syntax 等) の理論と実践を通して、文法の多重性を明らかにする。とりわけ、話しことばと書きことば、ジャンルやフレーム、感情や社会的要因を含む言語使用のコンテキスト (高梨、遠藤)、コミュニケーション形態 (土屋) などによる文法の多様性や逸脱的表現 (中山) は、単なることばの表層的なバリエーションや語用論的差異にとどまるものではないことを指摘するとともに、言語使用にみられる多様性や多重性こそが、文法構造の本質にかかわる問題であることを主張する。

「対話統語論からみた遊び表現の文法化現象」

講師 高梨博子 (日本女子大学)

本発表では、対話統語論 (Du Bois 2014[1]) を踏まえ、遊びのフレームとそれを構成するスタンスが、遊びを指標する話しことばの多様な表現を創発し、文法化に影響を及ぼしていることを論じる。対話統語論では、言語使用を認知的・社会文化的な相互行為と捉え、発話間の対応構造 (mapping structure) から想起される類似性が、言語の形式と意味の生成を促すと認識されている。

本発表においては、日本語における遊び心や愉快的感情のスタンスを示す「って」「たり」「みたいな」等の表現には、(1) 創造的引用に後続して、単独あるいは多様な結合形式で現れること、(2) これらの中には、他のフレームにおいて多重的に使用される一方で遊びのフレームに限定的に使用されるものもあること、等がみられることから、文法化には対話のフレームや感情のスタンスが変化の要因となっていることを述べる。

[1] “Towards a dialogic syntax.” *Cognitive Linguistics* 25(3):359-410.

「言語社会化における受益構文」

講師 遠藤智子 (成蹊大学)

近年の構文文法の枠組みの論点の一つは、文法に関する知識と状況に関する知識の分離可

能性である (Fisher 2015[1]等)。本発表は日本語の子ども養育者相互行為における「てあげる」構文の使用を詳細に分析することで、文法が話者の社会的関係構築において不可欠な資源であり、文法は特定の状況で使われるのみならず、状況そのものを更新することを論じる。

一連の受益構文の中で「てあげる」構文は大人同士のやりとりにおける頻度が低く、誤用はコミュニケーション上のトラブルにつながりうる一方で、家庭内相互行為においては「てあげる」構文は頻繁に用いられる。その多くは、養育者が兄・姉に向かい、弟・妹に対して何かを「してあげなさい」という行為指示である。このような指示は兄弟間の身体的・社会的上下関係を前提として使われるだけでなく、上の者は下の者に親切であるべきだという規範を内面化する言語社会化の場として機能する。

[1] “Situation in grammar or in frames?: Evidence from the so-called baby talk register.” *Constructions and Frames* 7(2): 258-288.

「言語環境に応じた言語知識の活性化」

講師 土屋智行 (九州大学)

本発表では、土屋(2016[1])のデータのうち、同一人物が同一のトピックについて、異なるコミュニケーション形態でおこなったやり取りを比較し、それぞれの形態で優先的に使用される構文パターンを分析する。

データは「旅行者役」「代理業者役」の2役に分かれた4名の英語話者による日本国内の旅相談に関する会話であり、それぞれのやり取りは異なるメディア(対面会話・電話会話・メール)で実施されている。具体的な手順として、データからn-gram表現リストを作成し、そのリストに対してパターンマッチング分析(Kuroda 2009[2])を実施することで、より説明力の高い構文とその継承関係を幅広い抽象で抽出し、比較する。

この分析をとおして、コミュニケーションの主体による構文の使い分けの実態の一端を明らかにし、言語環境に応じて活性化される言語知識の違いを単語・単語列だけでなく、構文の観点からも考察していく。

[1]旅行課題遂行会話データベース [2] “Pattern lattice as a model of linguistic knowledge and performance.” *Proceedings of the 23rd PACLIC*: 278-287.

「会話に見られる言語表現の文法的特異性」

講師 中山俊秀 (東京外国語大学)

本発表では、日本語を対象として、自然会話に見られる特徴的な言語表現をその文法的な特異性という観点から考察する。自然会話の中では、文法規則から逸脱していると思われるような言語表現がしばしば観察されるが、本発表の中では特に以下の表現について考察する:(1)「は、水曜日です」のように付属語である助詞で始まる表現;(2)「スープだけ」のように単語や句だけで構成される表現;(3)「おかしな家だな、ほんと」のように述語の後に要素が置かれる表現。これらの逸脱的表現については、省略や倒置などの操作を通して正規の文法構造から派生されたものとして捉えられることが多く、逸脱は表層的なものであると考えられているようである。本発表では、その逸脱が機能的単位、構文、起こりうる文法化など、文法の組み立ての根幹に関わるものであり、会話の背景にある文法は独自の体系をなしていることを主張する。

C室 (11月18日午後)

「英語史における定型表現」

司会 渡辺拓人 (熊本学園大学)

現代英語の定型表現は教育学や辞書学、語法研究、コロケーションなど様々な文脈で扱われるが、通時的に見た場合、さらに多くの事柄が関係する。言うまでもなく個々の表現はある程度の時間を掛けて形成されるものであり、そこには構文化やイデオム化といった言語内の要素だけではなく、文体や文化、他言語の影響など言語外の要素も深く関係する。特に後者には、時代による差異も当然予想される。

本シンポジウムでは、このような多様な観点から、英語史の各時代における定型表現の諸相を扱い、コーパス言語学や文献学的アプローチを援用しつつ、時代による特徴や個別の定型表現の形成過程などに迫る。表現によっては時代を跨ぐ場合もあるが、大まかな時代区分と講師は以下の通りである:古英語—小塚、中英語—谷、初期近代英語—渡辺、後期近代—現代英語—柴崎。シンポジウムの最後にはフロアとの質疑応答の時間を設け、議論を深めたい。

「古英語の動詞・目的語の語順にみられる定型性」

講師 小塚良孝 (愛知教育大学)

古英語の定型表現と言うと、詩の定型句 (formula) やケニング (kenning) などが中心的なトピックだが、本発表では、それとは異なる側面から古英語における表現の定型性について考察する。具体的には、古英語散文における表現の定型性と OV/VO 選択の関係について考える。

古英語散文における動詞と目的語の語順は、一般的には、情報構造、節の種類、要素の種類や重さなどにより決定されると考えられるが (e.g. Kohonen 1978[1])、その一方で、ときに語順が固定的である (または偏りがある) と思われる表現もある。本発表では、後者の事例に注目し、古英語における語順選択の一側面を示す。また、その観点から、中英語以降の OV 残存 (e.g. Moerenhout and van der Wurff 2005[2]) の一因についても検討したい。

[1] *On the Development of English Word Order in Religious Prose around 1000 and 1200 A.D.* [2] “Object-verb Order in Early Sixteenth-century English Prose: An Exploratory Study.”

「中英語における定型表現—binomials の場合」

講師 谷 明信 (兵庫教育大学)

定型表現の研究では、通常その内部構造に注意が払われ、異なるジャンルでの分布の違いなどに注目されることはあまりない。Idiom principle を主張する Sinclair [1] によれば、register が一旦決定するとそこで利用できる “slot-by-slot choices” は大幅に減少すると述べる。また、口承定型句理論においても、表現のみならず、場面との関係が論じられる。従って、定型表現はジャンルによりその分布が異なることが予測され、実際、Sinclair のもとで現代英語の定型表現の 1 つである binomials を調査した Hatzidaki [2] はその分布の違いを明らかにしている。

本研究では、中英語の binomials のジャンルによる分布の違いと、その表現の要素の (ir)reversibility を調査することで、binomials のジャンル間での使用の相違と、その変異および生成と変容を検討する。

[1] *Corpus, Concordance, Collocation.* [2] “Part and Parcel: A Linguistic Analysis of Binomials and its

Application to the Internal Characterization of Corpora.”

「初期近代英語における近接未来表現の消長」

講師 渡辺拓人 (熊本学園大学)

現代英語において、近接未来は be going to や be about to など幾つかの迂言的定型表現で示されるのが基本であるが、初期近代英語では、その表現形式はまだ限定されておらず、現代では廃用、あるいは稀な形式も使用されていた。たとえば Visser (1952 [1]) は、Thomas More の英語における近接未来表現として、be upon/in the way/toward に動名詞が続く形式を挙げている。また、OED は go/come near to の 16 世紀以降の用例を記録している。さらに、『欽定訳聖書』や Shakespeare に見られる be ready to もこれに加えることができよう (渡辺 2016 [2])。

モセ (1938/1990 [3]) はこうした表現の幾つかを、be going to と競合関係にあったものとして扱っているが、その後、この問題が体系的に扱われたことはないようである。本発表ではこれを取り上げ、初期近代英語の近接未来表現のうち、文法化した定型表現として後代まで残ったものと残らなかったものの差異について検討したい。

[1] *A Syntax of the E. Lang. of St. Thomas More* [2]

『近代英語期英訳聖書における未来表現の変遷』『近代英語研究』32. [3] 高橋博訳『ゲルマン語・英語迂言形の歴史』

「後期近代英語から現代英語にかけての定型表現と定型性の変化について」

柴崎礼士郎 (明治大学)

Campbell (1776[1]) は、接続詞や副詞連結詞を明示的に取り上げた初のメタ言語研究とされている。それ以前には軽視されていたテキスト言語学的あるいは語用論的課題 (e.g. パラグラフや文構造) へも目を向け、その後の英語文体の在り方に大きな影響力を与えたものと推察できる。例えば、談話上の文連結表現を扱っている点などは現在注目を集めている周辺部研究とも関係が深く、考察に値する課題でもある。本発表では、後期近代英語から現代英語における文連結表現の発達を取り上げ、談話・情報構造の点から考察を進める。具体的には、語用論標識 (あるいは投射詞) と判断できる *the thing is* 等の発達に注目し、定型性の変化へも触れた

い。英語史の各時代における定型表現がシンポジウム全体のテーマであるが、各時代の中でも（あるいは時代を跨いで）定型性が変化することも予想される（Wray 2009[2]）。

[1] *The Philosophy of Rhetoric*. Southern Illinois UP.
[2] “Identifying Formulaic Language” in Corrigan et al. (eds.), *Formulaic Language, Volume 1*, Benjamins.

D室（11月19日午後）

「音声研究の英語教育への貢献」

司会 米山聖子（大東文化大学）

昨今のグローバル化の流れより、日本人の英語力向上が急務となっている。それに伴い、英語教員の英語力や音声指導力に関心が集まっている。一部の現役英語教員の英語力の低さについてというような報道や（日本経済新聞[1]他）、本年5月には日本音声学会が松野博一文部科学大臣に「指導要領に定める英語音声教育実現のための提言」として「音声に関する科目の履修を英語の教育職員免許状取得の必須条件とすること」を学会として提言するなどがそのあらわれと言えよう（[2]）。本公開シンポジウムでは、音声研究がどのように英語教育に貢献できるかについて考える。前半は5件の英語教育に関連する音声研究や事例報告をしていただく。後半は発表を基盤とし、現在の音声教育や教員養成の問題点、今後どのように音声研究が英語教育や英語教員養成に貢献できるかなどについて、シンポジウム参加者を交えて全体討論を行う

[1]<http://www.nikkei.com/article/DGXLZO99283940V00C16A4CR8000/>

[2]<http://www.psj.gr.jp/jpn/notifications/20170525.html>

「英語教育のための学際的アプローチによる音声研究」

講師 荒井隆行（上智大学）

音声研究はこれまでも様々な視点で行われ、中には英語教育に関わるものも少なくない。英語の音の聴取に関する実験的研究も多く、我々の以前の研究では英語の/r-/l/の聴取に関して実験を行った結果、母語話者であっても前後の環境の違いによって聞き取りが異なることが分かった。別の実験では、雑音や残響環境下において英語音声の聴取訓練について取り扱った。

英語の調音に関しても、様々なアプローチが存在する。超音波診断装置を用いると、もともと見えづらい舌の位置や動作を確認することが有効である。また、声道の形を物理模型にした声道模型（Arai (2012[1])など）を用いて英語の音を模倣して生成することにより調音を視聴覚的に捉えられる。学習者が自ら手で模型を操作し母音や子音を発する発音訓練法も提案してきている。子ども向け英語番組にて発音に関する実験の監修にも携わっていることから、その実例についても紹介する。

[1] “Education in acoustics and speech science using vocal-tract models,” *JASA* 131, 2444-2454.

「通じる英語のための発音教育」

講師 近藤眞理子（早稲田大学）

講師 小西隆之（早稲田大学）

これまで英語の発音教育は、英語母語話者の発音をモデルとし、それに近づけるよう教える方も教わるほうも努力をしてきた。しかし昨今は、英語母語話者よりも、英語学習者同士が英語で会話をするもののほうが圧倒的に多い。

このような現状を踏まえ、様々な言語話者との英語でのコミュニケーションにおいて、日本語訛の英語のどこが通じないのか、さほど問題にはならない点は何か考察する。”*The North Wind and the Sun*”を日本語話者が音読したものを、英語母語話者、日本語母語話者、その他8言語の英語非母語話者が、流暢さ、リズム、分節音の正確さ、母語訛の度合い等を判定した評定を元に、英語の発音の何を間違えると通じないのか、どの間違いは比較的許容されるのか、聞き手の母語による違いはあるのか検証する。その結果を元に、様々な言語話者との英語でのコミュニケーションのための発音教育で、最低限押さえないといけない点は何か考察する。

「日本人は英語の blow と below が正確に聞き分けられるか？」

講師 田嶋圭一（法政大学）

英語は日本語に比べ音節構造が複雑なため、日本語話者は英単語を発音する際に余計な母音を挿入したり、子音連鎖の中に母音を知覚したりすることがある。このような傾向が音節の数（母音の有無）で対立する英単語（例：blow と below）の聞き取りにどのような影響を及ぼすのかを検討するため、日本語話者を対象に知

覚同定実験を行った。もし子音連鎖の中に母音を知覚する傾向があるならば、blow を below と誤って聞き取るほうが逆の誤りより多いと予想される。実験の結果、日本語話者の正答率は英語話者より有意に低かった。しかし、予想に反して below を blow と誤って聞き取るほうが逆の誤りより多かった。さらなる分析の結果、日本語話者は対立する母音 (below の第1母音) の音色の影響を受けることが見出され、日本語話者は英語母語話者とは異なる手掛かりに頼って英単語を区別していることが示唆された。

「日本人現役英語教員と日本人大学生の英語の日本語アクセント度について」

講師 前田菜摘 (利根中学校)

本研究は日本人現役英語教員と日本人大学生の英語の日本語アクセント度について日本語母語話者とアメリカ英語母語話者の英文発話の日本語アクセント度を判断する実験により検証したものである。本研究では(1)アメリカ英語母語話者の判定のほうが日本語母語話者の判定よりも日本語アクセントの判定が厳しいかどうか、(2)日本人現役英語教員の英文発話のほうが大学生の英文発話よりも日本語アクセント度は低いかどうかの2点について検討を行った。実験結果は(1)を支持するものであったが、(2)は直接的には支持するものではなかった。しかしながら、アメリカ人英語母語話者は現役英語教員の英文発話のほうが大学生の英文発話よりも日本語アクセント度は低いと判断しているのに対し、日本語母語話者は大学生の英文発話のほうが現役英語教員の英文発話よりも日本語アクセントが低いと判断していることが明らかになった。

「高校英語教育の現状と英語教員に求められる資質について」

講師 中村祐輔 (大宮東高校)

現行の高等学校学習指導要領には、改善の基本方針として『話すこと』や『書くこと』を通じて発信することが可能となるよう、中学校・高等学校を通じて、4技能を総合的に育成する指導を充実する」ことがあげられている。高等学校の教育現場においても、以前の訳読式授業からの脱却を図るとともに、コミュニケーションな英語力を持った人材の育成を目標に様々な取り組みを行っている。しかしながら、生徒や

教員の能力、高校教育現場特有の制約など目標達成における障害も存在する。本発表では、現役の高校英語教員として言語活動に重きをおいた授業を行う上での学校現場の抱える課題、教員に求められる資質について報告する。

E室 (11月19日午後)

「言語の変化、言語の成長—複眼的視点から」

司会 仁科弘之 (埼玉大学名誉教授)

音楽から言語へ、言語から他言語へ、範疇から上位範疇へ、文から談話へという境界間の「窓」を通して、言語変化・変異や言語成長・進化の兆しを垣間見たい。東条講師は、文法発見のシミュレーションに用いられてきた繰り返し学習モデルが、文脈自由性を持つと見られる音楽にも適用できないかをさぐる。小林講師は、コネクショニストの立場に立ち、中間言語も含めた第二言語習得の進行を母語干渉のメカニズムを考慮しつつ、学習シミュレーションモデルを構築する。吉本講師は、個別に範疇をもつ語が連結されて単一範疇の語(連語)として利用される現象に着目し、言語生成プロセスのモデル化に興味深い問題を提示する。開発中の国研の統語・意味情報付きコーパスを用いて、連語の特性と単語としての認定基準を提案する。田村・仁科講師は、主要部内在型関係節の統語・意味的特徴を精査し、通常の外在型関係節の統語・意味論と比較しつつ談話との接続点をさぐる。

「音楽における進化的言語学」

講師 東条 敏 (北陸先端科学技術大学院大学)

生成文法においては、人間が認知可能なあらゆる文は有限個の文脈自由規則によって生成可能であり、規則の原型は生得的であると考えられる。一方、計算機による自然言語処理では、文法とは語並びに関する統計的な偏りであると考えられ、文例の蓄積と機械学習によって翻訳・要約の性能が向上しつつある。人間に限られた期間において限られた文例から言語を獲得する際は、学習による規則化が行われ、Simon Kirby は繰り返し学習モデル(ILM)によってこの過程をシミュレーションした。我々は、これに認知バイアスを取り入れ、学習の高速化を実証した。しかし対象がランダムな文字列ではな

く、予め規則性が予測できるシンボル列に対してこそ、意味構造を反映した規則抽出が意味を持つ。音楽と言語は生物学的に同ルーツであり、音楽にも文脈自由文法が発見されているが、本発表では ILM が音楽に対しても同様な規則を発見できるかどうかを考察する。

「コネクショニストモデルを使った第二言語(英語)習得の実験」

講師 小林昌博 (鳥取大学)

日本人英語学習者が英語を産出する際に、分詞形容詞の接尾辞 (-ing 形と-ed 形) の選択をしばしば間違えることが知られている。本稿では、これは既に学習済みの-ing 形と-ed 形に関する英語と日本語の知識が後の段階で学習する分詞形容詞の学習に干渉して混乱が生じるためではないかという仮説を提案し、作業仮説を検証するために、分詞形容詞はまだ学習していないが進行形と受動態を学習済みの中学3年生と、分詞形容詞と進行形・受動態を学習済みの高校1年生、さらには学習が進んだ大学1・2年生に対して関連項目についてのテストを実施し、結果を比較分析した。また、既に学習済みの内容の影響をシミュレートするために、ニューラルネットワークを用いた学習モデルを構築し、英語学習者に対して実施した実験結果とコンピュータシミュレーションの結果を比較した。本報告は、その中間報告である。

「日本語複合的機能語中の名詞の「名詞性」について」

講師 吉本 啓 (東北大学)

日本語には、複数の単語からなる連語で文法上単一の格助詞やモーダル助動詞に相当する働きをされるものが多い存在する。あるものは、その構成要素の各単語が本来の独立した用法で使われること(例は、「について」)も可能だという点で曖昧である。この現象は、元々独立した複数の語彙項目であるものが単一の語彙項目として利用されるという点で、言語生成プロセスのモデル化に関して興味深い問題を提示する。国立国語研究所で開発している統語・意味情報付きコーパスではこれらのうちのいくつかを単独の助詞やモーダル助動詞としてタグ付けしているが、その認定基準は必ずしも明確ではない。当該の連語の中から形式名詞を中心に構成されるものを取り上げ、様々

な観点から「名詞性」の特徴を素性として取り出し、これらの素性にもとづく曖昧なカテゴリーを利用した言語解析・生成の過程を考察する。上記の連語のアノテーション法についても提案を行う。

「主要部内在型関係節の連鎖」

講師 田村隆夫 (埼玉大学大学院)

講師 仁科弘之 (埼玉大学名誉教授)

日本語の主要部内在型関係節は、通常の関係節と比較するに興味深く、広義の生成文法、構文文法、認知言語学等多数の枠組みで多様な分析がなされている。本発表では、国立国語研究所が構築した現代日本語書き言葉均衡コーパスを利用して、その実例を近代の小説から会話文にいたるまで確認し、作例も加えてこの構文を分析する。様々な「~の」形のうち格助詞を取ることができる、外延の意味をもつものを中心に扱う。通常は、出来事の連鎖は等位接続構造(英語では非制限用法)で表現されるが、実は内在型関係節は、格関係を加えながら出来事を連鎖的に表現でき、これは左方埋め込み文となると自然な文になる(林檎がテーブルから落ちたのを助手が拾ったのがまた床に落ちた)。類例は作例だけでなくコーパスでも確認できる。この連鎖構造の統語的特性を文法の適用範囲と生成過程から、意味特性を関係節・補文意味論と談話指示物の観点から考察する。

F室 (11月19日午後)

「慣用表現・変則的表現から見る英語の姿」

司会 住吉 誠 (摂南大学)

英語のデータを仔細に観察すると、従来の理論や文法では説明の難しい形や表現が存在する。近年、そのような「慣用表現・変則的表現」が英語のほとんどを占めているという研究者もあらわれている。本シンポジウムでは、これまで説明の埒外に置かれがちであった慣用表現・変則的表現を題材にして、各講師それぞれの理論的基盤や立場から説明を試み、現代英語の多様な姿を明らかにしたい。このシンポジウムでは、西村講師がメンタル・コーパスの観点から慣用表現を、内田講師が認知語用論の点からデンスとダイクシスの絡んだ変則文を、住吉が記述的な立場から

変則的な動詞補文を扱い、コメンテーターの八木克正氏やフロアの方々との対話を交えて慣用表現、変則的表現を考察していく。このような表現や形を集中的に扱い説明を試みていくことは、英語という個別言語の姿を解明する一助となるであろう。

「メンタル・コーパスとは何か」

講師 西村義樹 (東京大学)

英語を適切に使用するためには慣用表現の知識が決定的に重要であることを認知文法の新展開である「メンタル・コーパス (mental corpus) [1]」の観点から論じる。

認知言語学の特徴的な考え方の1つである用法基盤モデル (usage-based model) によると、言語使用を可能にする知識の多くは語彙と文法の双方に同時に属する。より正確には、そうした単位は語彙と文法が融合した知識の領域を構成する。特定の構文から独立した語彙項目、特定の語彙項目を含まない構文スキーマ、主語、目的語等は複数のそうした単位から抽出された派生的な存在であると考えられる。言語知識のこのような見方は、生成文法を含む他の理論が前提とする「辞書+文法書モデル」と対立する。

具体的な現象の分析を提示する過程で B. L. Whorf の「好まれる言い回し (fashions of speaking)」という概念の再評価も試みたい。

[1] J. Taylor (2012) *The Mental Corpus*, Oxford. (『メンタル・コーパス』くろしお, 2017)

「テキストのテンスとダイクシス」

講師 内田聖二 (奈良大学)

一般に現在時を基準とするダイクシス項目には他の時制表現との共起制限がある。たとえば、*yesterday* は過去完了の形をとる文とは相容れないし、*tomorrow* は過去形とは共起しない。

- (1) **Yesterday* he had almost lunged at Spencer's wife.
- (2) **Tomorrow* he had a lunch date with Enid Armstrong.

もちろん、「文法的」な文にするには *yesterday* を *the day before* に、*tomorrow* を *the next day* などにすればよいが、フィクションの地の文では、

(1) や (2) のような「変則」文もよく観察される。

本発表では、テキストのテンスがかかわる、一般の文法現象と一線を描く言語事象につ

いて、認知語用論からの知見を援用しながら説明を試みる。その際、過去時制で語られる場合と現在時制で語られる場合との違いにも及ぼす。

「動詞のパタンに見られる変則性」

講師 住吉 誠 (摂南大学)

本発表では、従来の文法や伝統的規範から見ると変則的な形である <try + V> という二重動詞構文 (例: Now Piaggio Fast Forward... is **trying change** the way they walk. —*TIME*, Feb. 20, 2017) と、assist の不定詞補文パターンを中心に扱う。

ふたつの動詞が連鎖する形は <go + V> を扱う記述的・理論的研究が多いが、Kjellmer (2000[1]) は <try + V> の存在を指摘し、この特異な形が生じる説明を試みている。また、Callies (2013[2]) が assist の原形不定詞パタンの存在を指摘しているが、そもそも規範文法では assist が to 不定詞の構文を取ることすら認めていなかった。伝統的規範からすれば assist の to 不定詞補文のパターン自体が変則的であると言える。このような「変則的表現」は英語の変化とも関わってくる事例であるが、本発表では、このような変則性についてどのような説明が可能かを記述的な立場で検討する。

[1] “Auxiliary Marginalities: The Case of Try” [2] “Bare infinitival complements in Present-Day English”